椀久末松山

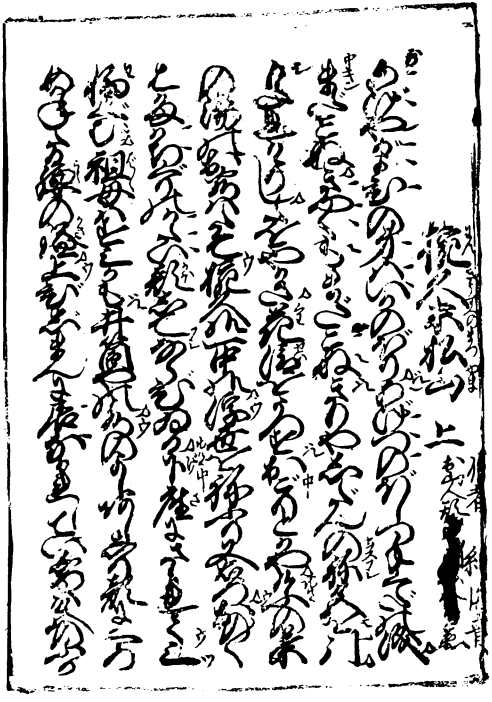
作者　紀海音

お山人形　辰松八郎兵衛

上

明揚屋通の身は瓜。あげつのぼしつ手管の涙。又來ぬ。客もまだこぬ桐屋紫檀のナホハフシ音色を彈き。もたれかゝりしたをやかさ。華清をうつす寄とかや。地色今日の茶の湯のお客は誰そ椀久様一中様。浮世をねぶり又右衛門。各袴かちぐりの堅い顏してフシ並びゐる。地下座にさされて三つ輪ぐむ。老婆はすみかも井筒屋の。水のよしあし知顏にくろめかねたる腰の鎰。上びじまんに居ながれし亭主は色のふかみどり君が根曳を松山の。雪の口切壺折の姿はすねて氣もすねて。酒落に酒落たるしやれ手前せかずへいそがずしほらしや。地先づ掛物は情しる虎少將が眞實を染め殘したる二幅對。表具は庵に木瓜の。素袍の昔思はるるフシ名は白拍子。祇王祇女。佛を願ふ朝夕のむすびし閼伽の水さしや。心の杉の木地ぶたのフシ氣の通りたる物好。いや色好へ曇ざはりも靜御前のその昔。もらさぬ水の堀川や小オクリ御所のへ宿直の棚さがしあられ煎りたる灰焙烙。班女がふかき思はくの。思ふにかひもフシなき世なら。身をも投ぐべき井戸茶碗。山鳥の尾の羽箒の。うはきな客とフシいひかはす。中は茶入の。飛鳥川。千壽の前が爪音に峰の。松風。たぎらする。釜は蘆屋に啼く田鶴の。友に久しき龜が。フシ葛葉の里の白在竹。熊野が在所の池田炭。こがれてくゆる薰物入は。越中が伊勢白粉箱。茶杓はおこと道心がハヅミ昔を泣きしフシまだら竹。中にゆかしや蓋置は。是なん消えし夕霧が。唇染めし紅猪口とフシ皆日を付けて感じける。地夜會に花は生けねども。亭主の顏は初梅に。柳あしらふ腰するて袱紗茶巾の取捌き湯音。水音汲みわくるハヅミフシ柄杓持つ手のしほらしさ。フシ利休が流宗旦が。妾腹なる孫姫が此世稀なる遊色と開いたる。口を閉ぢかねし。地色盜みといへばにくけれど戀とて忍ぶ緣の下。白い腕を差出して客の脇差奪はんと。もがけども手が屆かねば股引はいたる男ずね。ぬつと差出し親指に下緒引つかけ取る所を。椀久見付けナウ何れも。太夫が茶の

湯に鬼神も感ぜしめ。心なき脇差が宙を飛ぶはと言ひければ松山かしこを差覗きヤア道柴殿是は誰ぢやと頬かぶりをとれば。御籠の作兵衛さて興がるどうぞいの様子を言へと責めかくる道柴とかう答へせず。ナウ作兵衛殿刃物が無けりや死なれぬか。舌でも喰ひ切らんとスエテもだえ身ぶるひ泣きゐたり。詞椀久せかぬ顔して。様子はきかねどそちたちが命は七福神の前。巾着を開いたら助けられさうな事。地色毘沙門にも愛染にも拙者が成つて。願をかなへてやらう長う聞くのも初心な事。高はどうしてかうしてとつまんでたつた一口に。話せといふも大様にフシ脇目をしてぞゐたりける。地色道柴袖にすがりつきさて有難き御一言。死なうと覺悟極めたも五十兩の借金ゆゑ。身を長崎へ賣られ行き添ひたい人に別るゝゆゑ。その仕覺さへなるならば見えぬ冥途をあてにして。何の心中したからう生けうとも殺さうとも。お前のお心一つにと涙の内に笑顔する。男も共に涙ぐみ扨面目なき次第なり。私めも腹からの御籠昇にてもござりませぬ。短氣おこして親の内を出で此二三年肩に物を置きまする。地色戀の歌は習はうとも貧の盗はせまいと思ひしに。死損なうて淺ましき名を流



椀久末松山

さんかと差俯向いて泣きゐたり。椀久うなづき扨々心易いこと。一夜に捨つる豆板の露より輕き二人が命。きづかひすな請取つたそれ又右衛門。詞最前の小判をといへば又右衛不機嫌にて。お志は御尤なれど。此金は笛分の御吉例借錢乞を打出す豆板。地色上はばゝ様頼御より。下はまゝ炊花車六尺。我等が宿の鼻そげまで今宵をあてに。貫紬半疋買ひかかつて着せました。詞其心あて違うては兩人は悦ばうが。迷惑は大勢の者地角を直して牛殺す。何とも暗き御政道とフシにがり切つてぞ申しける。地色大盡につこと打笑ひ尤も〳〵。詞汝が心も背くまいと小者を呼びてやい汝は。走り歸つて手代の六兵衛に言はうは。のがれぬ事にて金五十兩入用あり。只今持參せよと云ひければ。地色其時皆々手を合せ一切衆生平等の。如來の御慈悲有難し。道柴様勝手にて。眉取つて御内儀姿作兵衛殿は股引に。肩衣着し婿君の鬢付一兩御祝儀に。又右衛門がはづむぞよ今宵はどうやら物騒な。肌の一歩のひえぬ内。はや豆打とそやし立て奥の座敷へ三重へ入りにけり。地金にかつえぬ禿花車物縫中居下男。座頭の久都二人連お出入の尼道心。町代夜番の子持嗚。足をつま立て走り出でオクリ時刻へ遲しと待居たる。地色椀久其夜の裝束には肌には好む白天鵞絨。中着は黄無垢上着には太夫が仕着せの黒羽二重。淺黄の袴股立取り靜に歩み出でければ。お傍去らすの一中は箔置の絃掛に。一歩豆板山をなしさもフシうや〳〵しく伺候する。詞其時大盡高聲にそも節分の祝儀といつぱ。昔日江口神崎や情揚屋の小座敷に。化物有りと云ひふらし七つ過ぐれば女郎の。往來も絶えてあらざれば一門一家是を歎き。戀の女神に五釜の湯を參らすれば有難や。神子に託宣ましまして。汝が家の妖怪は。狐狸の業にもなく。逆柱有る家にもなし。多くの者がそこに來て家を亡ぼす魂の。地色假に止る化生の業沈み果たる一念の。ほしい惜しいの豆板を年越の夜に蒔くべしと。示現に任せ行へば。妄執忽ち去りしとなり。それより年月隔たりて傳へて知る人無かりしを。我好色の冥加に叶ひ江口の君の夢想を請け。古きを追うて新しき。今宵の祝儀面々が手柄次第に拾へやと。惠方に向いて鬼や外福内へ撒き出せば地突退け押退け捩合ひてフシいさかひすべき氣色なり。地色かゝる所へ編笠深く身持姿。最前の小者を連れ座敷へずつと通りければ。詞椀久見るよりこりや慮外者。主人の前で立ちはだかり殊に笠はと引取れば。地色親久右衛門はつとばかりに飛びすさり。揉手をすれば面々も。周章狼狽

き尻込しッゝ座敷の興はさめにけり。詞久右衛門詞を鎭め。ヤイ久兵衛何か金子入用のよし手代六兵衛は留守なれど。急なる事と聞きしゆゑ幸ひ昨日の爲替の金。汝が手より請取つた財布の封も其儘に。地色只今渡す請取れと機嫌は悪しく見えねども。胸に應ふる誤りの。詞も出ずす腑向けば包み切れたる腹立の聲あらけなくわめき出しやれ痴呆者大盜人。騙り掠めてけしがうより親の許してやる銀を。遣はぬかやりをらぬかと。地色肩も背中も遠慮なく。財布押取さん〳〵に破れよ碎けと叩くにぞ。口もほどけて石瓦はらり〳〵と出づるにぞ。皆々驚き拾ひあげッシ是は。〳〵と呆れぬる。詞久右衛門涙をはら〳〵とこぼし。初對面の方々へ不禮の段は御免あれ。折檻の仕樣もあらうに。晴れなる中にて一分を捨てさするは。子は可愛うないかと思されんが恥かしい。世間の親とは違うて。相應の金銀を費すを厭ひは致さぬ。又阿房つくすを嬉しうはなけれども。褻にも晴にも獨子。五つの年に母親が流行風にさそはれて。死ぬる臨終の際までも彼めが顏を打守り。早う別れう故にやら人より殊に可愛うて。背丈の延びる嬉しさに。年月暮るゝを待兼ねしに。髮結ふ顏も得見ずして別るゝ事の悲しやな。乳母といふもの有るなれば乳にかつゑる事もなう。てて親のましませば牛馬にも踏まれまい。心にかゝるは繼母が抓りつ叩いつ憎まうかと。地色思へば〳〵情なや。千部萬部の弔ひより我が後世のため子の爲に。詞閨の枕は淋しくとも後連持たせ給ふなと。地色言置くことを目と耳にとゞめて歎き暮す故。詞一門どもが壁訴訟。商人の身に女房が。無けりや濟まぬと呟くを聞かぬ顏にて年月を。やもめの膝に甘やかした る誤と。思へば今迄の放埒をも强意見した事はなし。爰を聞いて給はれ。昨日取りたる爲替の銀を此石瓦にすり替へて。親に一杯喰せしを當座に探り覺えしが。アヽまゝよ云はゞ纏に五十兩。地色叱立してゆすられて家出やせんと案じられ喰うた顏して濟ませしが。思へば大事の分別所。親なればこそ子なればこそ。世間へ出せば體金も同然たり。是に懲りずば如何樣の事仕出さんと。人々に咄して耻を與ふるもきやつめが爲。假令此身も諸共に袖乞の身と成り行くとも。母が形見の撫子の故と思へば悔みはせぬ詞ヤイ物知らず義理知らずめ。せめては月に二三度は宿の妻をも訪めぬぞいとほしや舅の義右衛門。汝が痴呆を知らずして器量と皷になづみつゝ。つてにつてして戀聟の癩娘を名ばかりに。地色そぶ〳〵とした女夫仲。それを苦にしてぶら〳〵

と。煩ふ娘の顔を見て。さぞ後悔に思されん。おのれが憎き餘りには某までを怨まれん。舅と姑と内外の。義理の缺くるが口惜い。おのれにかゝり某が命は五年つゞまらう。悪しかれとは思はねど不孝の積もる天罰の。成り行く末が不便なと スエテ怒りつ泣いつ口説くにぞ。 傍に居合す者どもも思はず フシ涙を流しける。 地色 椀久鬼角の詞なく脇差ずばと抜き放し。自害せんとする所を松山縋りとゞむれば。久右衛門立上り。 詞 ム、親の意見をむやくしう思うて死なうとな。やれ。とても腐つた根性からは。生きて居ても花實は咲くまい。併しおのれ獨り殺しては。冥土の母へ言譯がない。 地色 逆ながら某も皺腹切つて追付かん。死ねや急げと責めかくる フシ聲も涙に震ひけり。 地色 松山泣く〳〵云ふやうは。 詞 ア、勿體なき御仰かな。 地色 世に有難きお志何しに悪しう聞し召さん。篤と御合點いたさうな如何な事明日よりは。廓通もなされまい我身も今のお詞にて。ふつ〳〵思切りました。此廓を出ぬ法もあれ今から文も通はさじ。是に免じて此度の御腹立。御許し下されよと スエテ涙ながらに搔き口説けば。椀久顔振上げなに懇切るとは擲るるも叱らるゝもおのれ故と。 地色 云はんとするを口に手を當てナウこれ。 詞 杖の下からも廻る子が可愛と言ひまする。お慈悲な親御が憎うておつしやらうか。いとしいこな様にお爲にならぬ事を申さうか。これ常は是程の事はつい合點の行くが。いかうせかしやんしたさうなお道理ぢや。大切な人の命二つを救はしやんした。五十兩の金違うたと云うては義理が立たぬ故。死なうとの事であらうナウ。わしも太夫ぢや。こな様に引もつけますまい。二人の者も死なしはしますまい。 地色 お前が双物三昧なさるれば。面打の様にて親御様が。一倍お腹を立てさんすと スエテ縋り付いてぞ泣きゐたる。 詞 久右衛門聞いてホ、神妙な心底。年寄めが心を感じ今の一言たがへ給ふな。家藏も埃まであれめが物。 地色 金故義理は缺かせまいと懐中したる金子にて。悴が命は拙者が買ふ。汝は二人が命を買へと。包ながら投出せば。どこやら粋な親御様と フシ皆皆顔色直しける。時に久右衛門合口拔いて椀久が髻根より切落す。是はと云ふを ア、騒ぐまい〳〵。 詞 世間の聞え舅への義理。勘當せねば立たぬ首尾俗の姿で追ひやらば。 地色 中々浮氣は直るまい。さあらばあられぬ方便事。又は様々悪心募りて悪名を双に殘し。屍を野邊に晒されんを久離の子とて餘所に見て居られうか。 詞 姿を變ゆる此上の慈悲首を繼ぐのことぶき。 地色 衣に染めて里々を托鉢して世を

送れ。それとも飢に及ぶなら指圖はせぬ・が從弟も有る。家來の門へ立つとても咎むる程の事あらじ。是もいふまじ他人ぢやもの。憂しや浮世と横へ振る顏は涙の置所。地色金言耳に應へてや得心顏に椀久は。親に向つて一禮し何處ともなく出で行けば。松山やがて追付いて妻も許さぬ出家とは。はてやくたいもない何處へと扣へる袖を振放し。詞ヤイ最前わが方より懇切つた。地色ナウ切らうと云うたは切りともなさ。親御樣のお心を宥めんばかりに胴慾な。お心とも知らいで假にも云うたが悔しい。氣遣さんすな傾城を居宿りにして成りとも。圍へましよ我身を捨てゝ行かうとは。曲もないやらぬやらぬと縋り付く。地色一中見兼ね中に入り御勘當は當座の事。とやかうあれば却つて椀久樣のお爲にならず。萬は我等呑込んでゐます追付け目出度う逢せましよさもあれ餘りお姿の。見すぼらしうてお笑止や。地色垢馴れたれど一中が。心計の餞別と十德脫いで着せければ。地嬉しや是も後世の緣。廓は西方極樂の二十五歳の夢の內。醒むれば何の變哲も無き世の中こそ三重へ哀れなれ

中之卷

夢路には。足も休めず通へども。現にかへす俤や姿の闕の座敷牢。我物盜む金銀の科ぞと思ひ諦めし候べく候に馴れた目の。地色近付ならぬ文字よみもはしり智惠とて小器用に。古文も半空にやる名のゆかりとて西の銘。詞乾を父とし坤を母とす。何ぢや乾坤を。父母と云うたは此唐人めも。勘當に逢うたさうな。不夜城の仕過か妓女文作が募つてか地色咄の合はう男ぢやと。得手に引込む註釋は壁の耳さへ耻かしき。地色舅の義右衞門次の間に咳拂ひして詞をかけ。詞ホヽ結構なお心がけ。此樣子を親久右衞門が聞かれたらほろりとしられう。ナウ若い時の不屆は世にある習ひ。勘當が慘いの面目がないなどとて。必ず短氣な魂を持給ふな。つまらいで駈落した者も。心が直れば富士を見たが德になる。沙汰はない事身共も。二三年前までは。節季々々に二三十兩程の仕過。地色塵が積りて山の神に前垂で縛られたも。さら〳〵耻とは存ぜぬ聟殿をかくまに。座敷書院打開き。伽こしらへて朝晩の御馳走申す筈なるを。小暗き一間に押込めて置く故に。娘が怨めしさうに親の顏を打守るが。目に餘りて不便なれども。詞かやうに致すが御身の藥。又は詫言の種にと存じての事。僅か十日か廿日の內不自由をこらへ給へ。地色最早今宵も初夜半時所帶持の第一は。夜は早う寢て

朝起の。稽古に功を積み給へと教へて奥に入りにけり。地色かゝる折節妻のおさん同じ見舞も色含む。氣に覺ある差足や世間晴れたる妹と背の中に思はぬ川出來て寢所替る。宿直臥。地色小腹が立つて夜が寢られずあくる翌日は十六日。地獄の釜の蓋さへ開き。餓鬼も嗜む男ぶり三途の川原をぞめくとかや。如何に斯うした時なりやとてお髪も結はずばらばらと。頭の延びた故にやらお色の悪い顏が。目にスエテちらばうて氣の毒な。地色暫しの内と固めたる下紐の闕解かずとも。目に正月の御祝儀に髭など剃らせ參らせんと。剃刀茶碗持ち添へて。かしこに來り佇みていかう靜な。モウ御寢なつたかと。フシ内の。樣子を窺ひゐる。地色斯くとも知らず椀久は大欠伸三つ四つして。詞世の中の親父といふ親父に。霞のかゝらぬ親父は一人もない。錢金持つても太夫に逢はずば何の樂があろ。淋しいとて宵から寢てはあつたら目が愚痴になる。新町橋はどちらの方ぞ廓は爰から見えぬ事か。地色エヽ今時分三枚肩で押す奴もあろ。一中が咄も油がのる最中。備前の野暮めがとつくりとしおとし顏に弄りをろ。張をもつ太夫なれば一倍厭な身振して。格子へ出て犬そばやしてゐるを見るやうな。其處へちよつと拙者が顏出したら忽ち笑顏をお目にかけるに。詞損料貸しの天狗の羽はないか。揚州の鶴は下りぬか十萬貫を腰に付け。地色太夫を引掛け立歸り千年を結ぶ松山に。逢ひたい見たい戀しいと。願の糸の二上りや八百萬代の神かけて。どうか斯うかと。行末を。思うて胸を燒かうより。いつそ此身を。捨草の露と。消えなば。恨もあらじ。只鬼に角に世の中は。かの一色の儘ならば罪な作らじ。諸共に。邪淫の悪鬼は身を責めてその念力の道も戀路も高塀の上に繼しき人は見えたり嬉しやな。地色ヤレ松山か早う爰へと招かれて。急かるるからに足震ひ。飛ぶよと見えしが緣先の石の角に胸打ちて。うんとばかりに息絶ゆる椀久はつと走り寄り。呼び生けんにも勝手は近し水も藥もあらばこそ。途方涙にうろ〳〵とスエテ手足を抱へ居たりけり。おさん此有樣を見るよりも恨み妬みも餘所になり。涙備す仁愛の襖を少しおし開けて。茶碗の水を差出せば。椀久嬉しく押戴き心と目とに禮言はせ。太夫が耳に呼きてナウ是女房が。菩薩心にて大悲の水を與へしぞ魂返して一言の禮云うてから死なば死ねと口より口に入る息のやう〳〵心付きけるにぞ。抱へて座敷に上りつゝ互に目と目を見合せてスエテ抱き付いてぞ。泣き居たり。地色おさんも襖の此方にて袖を絞りてゐたりしが。包む

に餘る言の葉の扨も見事な心中やな。地 戀に命も捨つるとは咄には聞いたれど。目に見たは是が始め我夫のみか世界の人親の諫世の謗も構はず行くは浮れ女の。此誠より迷うての事情の道も戀路をも。今宵の今覺えたり。我はもとよりフシたらちねの。地色懐出でぬ生娘にて浮瑠璃や歌舞伎をば。此道の學問にて女心は一筋に男はどれも悪性なと思ひ諦め居たれども。詞仲居や下女が陰言に奥様はうつそりぢや。人形ぢや佛ぢやと念かす下から悋氣して。地色更けて歸らせ給ふ夜は物のたまふも不返事に。枕蹴散し頭から後向いたる寢姿の。厭らしからう憎からう。お腹が立つたであらう物と思へば今更耻かしや。詞今年は斯うした事の出來ようとてか初春祝ふ染小袖に。腰元が油をかけ秘藏の三毛は鼠にかまれ。地色何かに付けて氣掛り故天神様の裏門にて八卦見て貰うたりや。詞申酉の方の女が呪ふといふ。それには私もせき上げて。地色憎やおのれに負けうかと。貴い坊様聞出して道切の札離別の御符。精進したり垢離かくを爺様へ聞えて。男の内に居ぬは女房の馳走の足らぬ故。左様な邪な心持つ故。久兵衛殿に憎まるゝと殊の外叱られても。エ、無理な事ばつかり日本國に我程な。地色男思は有るまいと思ひし事の愚さよ。遠き廓の關を出て幾重の門塀乘越して通ふ人さへ有るものを同じ内に住みながら。親同胞に遠慮して襖一重を越えかねて。心一つに歎きし事。愚痴とや云はん不屈とやせん疎まれたるは我身の科。思へば器量も心中も。劣つた物負けた物。さうとは知らでくし〳〵と。昨日迄も今日迄も傾城とやらに騙されて斯様な憂目見給ふといとしろも亦憎うも亦。思ひし事の勿體なや耻かしやとフシしやくり。上げてぞ泣きにける。地色松山も共に打伏しぬたりしが。ナウおいとしらしいお心や町女腹の一筋に。詞男をいとしがらしやんすに。名も浮れ女の心中が何しに及ばうぞいの。嘸や今迄私が名を聞かしやんすも憎かつたで有らう。お腹の立つたはお道理でござんす勤の身でさへかはゆい男には。悋氣するといふ様な物ではござんせぬ。地色如何程惚れた人にても女房の有ると聞いては。どこやらがをかしからぬを椀久様とは異な縁で。詞お前といふが有るを知りながら只滅多にいとしうて。假令大名の奥様と呼ばるゝとも如何な事行くまい。よしや一生妾と云はれうと椀久様には離れまい。地色是程には思へども假にもお前を去らしやれとは。神かけてフシ云ひはせぬ。地色取交したる起請にも變らじとは誓ひたれど。夫婦になろとは得書かぬも皆こな様へ立てゝの

事。ゆめ〳〵お二人の中裂かうとは思はざりしを。詞恥かしや今參りしはいかい悪心ナウ椀久様も聞給へ。内々の井筒屋の客が請出すに極り。金も渡して明日は國元へ連れ行く筈。姉女郎や傍輩衆目出度いのあやかろのと。地色肩や脊中をつくづくと心一つに思案して。聲へ泣いても笑うても今宵明けては歸らぬ事。こなたを誘ひ立退きて何處如何なる山の奥。葬の宿に忍びても女夫事して遊ばんと。路銀も才覺して來たと袖より袱紗投出し。斯う迄はしたれども其淺からぬ御仲の。目を盗人の振舞して通ひ參りし罰當。不慮なる怪我に自は冥途へ半參りしを。そこの情の一雫に二度いとしい顔を見て思も戀も晴れました世の中の仇を恩にて報ずれど。恩を仇では報はぬとや。地色思切るは切つたれども。田舍へも下るまい廓へも歸るまじ。鬼角は心一つにと むせ返り。てぞ泣きにける。地色お さんもあつと聲立てゝ嬉しき人の心やな。詞それに就き我身の上の悲しき事明し申さん聞き給へ。常々母様の仰には厭がる男には添せまい。暇取つて戻れとせぶられしを。地色とやかう延べてゐる内に。斯うした首尾に成つてはいよ〳〵の事。されども父様が頼もしうて。他人でさへおちめには見はなされぬ。まして露ばかりも如才しては。世間が立たぬと云うてかくまへ置き給へど。詞母様がわゝしうて子にかへての義理立は。をかしいの厭らしいのとねすられて。此二三日はどうやら父様も思案顔なる體を見て。地色我身の悲しさ主様に咄して。笑を立退きて添はうか。イヤ何もしつけぬ我なれば長らへ憂目見んよりは。いつそ諸共死なうかと。様々思ひわけれ共なま中咄したとてそなたと云ふ深い仲あれば。地よも自らとは死なうとも退かうとも御合點は參るまいと。思へば恥しうて包みしが。詞今咄しますは惜氣でも何でもない。地色そこにも主に別れてはよも生きては居られまじ。其命を私に呉れて。連れ立ち退きて添ひ給へ。二人の内に一人はとても死ぬる命。同じくは相思ふ中は殘り給へ。我身は鬼にも角にもならん。さは云へ夫婦は二世といふなれば。此世は松山殿と添ひ給ふとも。未來は必ず自と妹脊の契變り給ふな。言ひ置く事は是迄と持ちたる剃刀逆手に直し。自害せんとする所を椀久あわて止め兼ね。襖の下に押伏すれば死なんともがく女心。されども強き男力。恨めしげなる聲を出し諸共にとも云はじこそ。身をば恨みて死ぬるものをそれさへ儘にし給はぬ斯くまで憎き我身かと恨み罵り泣給へば。是非に迫りて椀久は。フシ只せき上げて居たりけり。地色

松山立寄りそゝけし髪を掻撫でて。我身を立てゝ死なうとは有難や忝や。添へと許しを請けたれば最早千年萬年も。契つた心地の致しまし微塵も殘る事はなし。則ち只今返します親御の心さがなくば。何處でなりと添はしやんせ夫婦と知れた仲なれば。浮氣とも徒とも指差す人はござんすまい。我身は金に任す身の死なねば濟まぬ心なれど。お志のせつなさに義理に憂身を沈めつゝ。請出されて行きませうナウ椀久様。今歸りなば翌日よりは田舎女房と思召せ。お心ばし殘されな自ら廓に無きならば。地色定めてお身も納まらん勘當も御許され。御夫婦目出度う榮え給へ。起請こそ今は仇なれ是なくば忘るゝ隙も有りなんと。引き破り嚙みしだき思切つたる顏ばせの。詞は清く目は濁る睫に玉を持たせつゝ。ずつと立つて出でければ椀久急いて聲を上げ。實正田舍へ下るかと走りよつて引据ゆれば。おさんはやがて起上り死なんとするに又立歸り。持ちたる剃刀もぎ取らんと振合ふ際に松山は。梢に帶を引き掛けて塀の上にひらりと登り。椀久様おさん様不心中はお爲ぞや。世間の誹はよき様に。頼みまするといふ聲もオクリ泣く〳〵飛び降り出で行けば。地色南無三寶しなしたり。その根性と知るならば最前に殺さうもの。よしなき水が仇となり備前の客めにうまうまと。添はせん事の口惜しやと足ずりして居たりしが。エゝ腐つた心底と知らいで其方を。此年月袖に思うた面目ない。せめて彼奴めに恥をかゝせて腹愈と。馳出る袖を引留め。女郎に科はない皆私故の事なれば。共に言譯致さんに連立ち行かんと泣出だす。椀久聞いてイヤ其方を連行きては親達へ言譯立たず。暫しが内遠ざかるとも女夫の仲は變るまい。さらばと云ひて最前の私の梢に馳けのぼる。おさんは猶も跡を慕ひ。嬉しい詞聞くからは親には生きて別るゝとも。同じ道にと這ひかゝる松の梢の蔦かづら。よれつ縺れつ離れねば。不便ながらも剃刀にて形見に殘す下紐の。中よりふつゝと切り放せばかつぱと落ちて泣叫ぶ。出で行くつらさ止る憂さ。互に心くみ帶のきれぎれ。になる　三重　へ世ぞつらき。

下之卷

椀久道行

三上リ唄　辿り行く。今は心の。浮かれきて。末の松山。思の種よ。合手死なうかの。どうもせ。これ〳〵〳〵君ゆゑに。あのや椀久はこれさ。〳〵。鼓の皮よのほんえ。しんぞ此身はこれさ。〳〵。うち込んだ。しんぞのほんえ。とかく戀路のナホスフシ　亂髪。起きて別れし。俤の。小オクリ

問へど答へずしよんぼりと。去りし寢覺に締め合ひし肌と肌との其うつり。フシ昨日は今日の。昔にて。そも我ながら淺ましや。謠法師々々は木のはしと。思ふは野暮よわけしらず。心の花の薫をば。知らせたいぞやア、はち〳〵。詞此十德も其緣一中がくれをつた。フシ智惠も器量も身代も。皆淡雪消え失せて。交せし事の替るとも。變らぬやうにと先の世を。先で逢ふやら逢はぬやら。どうやら斯うやら知らねども。せめて未來は違なく。我と一所に極樂へ。それも叶はぬ物ならば。たとへ奈落の。底までも二人手に手を。取り。組みて。スエテ離れまいぞや君琥珀。我は塵かや身に積る心の。芥。胸に滿つ。それがこうじてきよろ〳〵〳〵。けら〳〵笑ふ。フシ物狂ひ。とても濡れたる。袖ながら。一村雨を脈はんと。立寄る軒の格子より色をあらせる玉琴に。過ぎし騒を思ひ出し。詞來いよ久助。地伽羅の下駄。珊瑚珠の杖と手を叩くに。あいと答ふる者もなし。無いも道理よ此なりぢや。アツア思ひ切らうか切るまいか。切るに切られぬ戀路の劍。はた〳〵はたはたくる〳〵〳〵。狂ひ廻るや。破車のフシわが姿。井筒の水に。映しては。扨も寞れた誰故に。君故にこそつからからね。長地其曉の睦言もなか〳〵今はあだし野の露も洩さじ我思。亂心にちとはち〳〵。フシ狂ひありくは何處〳〵ぞ。祈る證を長町や。道頓堀へよこたはる。唄鴛鴦の簾を洩れ出づる。緋無垢黃無垢の空炷や。あれは呂州か白人か。客屋の三味の三下り。三下り唄我身の斯くなるは。如何樣不思議松にあいたぞなんつかしのでい〳〵。なんぼ身請で急かすと申すとも。可愛男と。見かやせまいぞいの。なんつかしのナホス俤や。フシ色で固めし。軒のつま。

羨こそ女護の島の內。堀江の文の便りさへ橋が無ければ渡られぬ。戀に願は西方の玉の臺の阿彌陀橋。うき長堀もわんざくれ。濡れてぞ渡る立賣堀。法に我名を黑めても住み憂かりける此浮世たゞ渡られぬ薩摩堀。問へども君に阿波座堀羅魚場安治川福島や。迷ひ行けども其人に。似たる人さへあら情なや。こは何とせんフシ身の果てと。泣いつ笑うつ。又はち〳〵。あれよ笑へと皆跡に付いて。きた濱今日も早や狂ひくたびれ足立たず。彼處の土手に坐りつゝスエテ芝を。褥に伏しけるは目も當て。られぬ風情なり。

地土氣の取れぬ備前客。戀の素燒に松山を千代の子の日と引拔いて人月も旅は遠慮なくフシさんざめかして通りしが。地色心にかゝる玉簾の鴛鴦の隙よりそれと見て胸の氷も消えゞ〳〵と抱き付かんと思へ

ども。人目をふせぐ八重垣の泣かれぬ其つらさ　地色早次郎羽織袴立てさせ。あの坊主めは此頃町中を徘徊する氣狂六法よな。地色器量といひ手足の尋常さ。銀遣の拔穀ならん不便の事や。それ丁稚錢掴ませと云ひければ。地三介それ頓て立寄りてこれや疑耳へ百錢が這入るは旦那のお陰。仇に思ふな皆の衆が一日汗水になつても。かたはなに八十四文はか儲けぬに。地色福德の三年目乞食仲間の仕合者。起きよ。〳〵と搖られて。地椀久ずつと立上り。何ぢや此錢を主人が臭るゝとや。ヤイ善根と云ふはな。未來の福田を時くとて往來の人が。地色慈悲の袖より漏るゝ一錢二錢を請け喜んで貧僧が。朝夕の煙を立つる助とはする。肌を隱す布子は着る。後世を願ふ十德あり乏しきにはなきものを。覺えなきに合力とはたわいなき僭上人。花にくるゝか露にはづむか。冠古けれど沓に穿かず。大盡は腐つても太鼓は持たぬと突戻す。地色早次郎打笑ひ扨々心ある氣狂や。そも左樣な堅い事は誰が教へけるぞ。ナウ氣狂の眞似とて狂へば直ぐに氣狂。四方に淺ましや悲しやと涙を流して語るにぞ。是は尤も〳〵と皆々袖を絞りけり。地顏は隱して松山は雪をかづける綿帽子。涙の玉の小間金を袱紗ながらに差出し地ナウ坊樣是はな新町橋で拾うたが。四萬の藏有れども限有る金銀を。色の奴と遣ひ捨てし天の罰親の罰。金の罰が當つて目前の法師が有樣。見ても聞いても嗜み給へ歸らぬは昔。止らぬは浮身の末戻さうにも主が知れねば此所に捨てゝ行く。地色同じくは坊樣拾うてなりとも下さんしよば。嬉しからうと言ふ聲もなつぼらしう聞えけり。地法師受取り押

戯き。お姿は見ぬが御器量さうな。物腰が素人ではない。お肌に添うた袱紗めにあやかつて 令懐かしい人の懐に寢たい。 詞殊に新町橋で拾うたとあれば辻占がよい。太夫を仕落した客めが頓病死して。二度身どもが手に入る吉相。 地目出度い目出度い祝儀の爲の一踊。 唄水を汲みやらばようやよやよ小川で汲みやれ小川小石川轉び合うて轉び〳〵〳〵轉びかゝるとよえようやよやよヲ。小川で汲みやれ。小川小石川轉び合うて轉び。轉び轉び轉びかゝるとよえ。褄はひくとも外へ靡かじ。 地あれ閉給へ外へ靡かぬ心底を。かはゆう無うて何とせうと スエチ踊りつ泣いつ狂ひける。 地然る所へ作兵衛道柴驅け來りさて〳〵曲もないお仕方。女夫の者が今まで此世に長らへるは。お情故とは誰知らぬ人もどざりませぬ。そのお前に袖乞させまして。我々が家の内に居られうものか。假令水を湯にわかし我は飢ゑてもこな様を。かくまへまして行く〳〵は何ぼ父御の當分は。石で手詰めた折檻なるとも。月日の立つに從うて。親は泣き寄り片端なる子の可愛いと申せば。御歸宅は追付の事暫の内も人が見る。お草臥なら作兵衛が。負うてなりと抱いてなりとも歸りませうと。恨みつ。泣いつ搔き口說く 地思ひ餘りて松山は。駕籠の窓より顏差出し何誰かは存ぜぬど。頼もしきお心や見れば物狂しき御有様。夜晝付いてなりとも外へ出して下さんすな。頼みまするとと云ふ聲も フシ心迄くる涙なり。 地道柴そこへは目も遣らずこれ作兵衛殿 詞我身も同じ流の身。犬猫の様な傾城と同じ様に。思はしやらう所が恥かしい。あつたら金をせめて川へ捨てたらば。どんぶりとも云はうに。よしない四つ足の藥喰遊ばして。 地斯くまで衰へ果て給ふと フシ恨の角を生しける。何我事を衰へたとは今でも歴々の手代あり。ア、慮外ながら御大盡。浮世小路に駕籠はあれど。君を思へば藥草履花につらしと詠み置きし。嵐が六法よいよさ。荒い風にもようやよぼいほ當てまい様を。やろか信。濃の。 詞ハア冷いなけに。雪國へサアサさん此え。川ぢや。さんざら柳のよいよさ。白根が〳〵よいてがよいてが。駒のひざふしんからが。膝栗栗毛にしんがらり。 詞乘つたか乘つたぞ。 地信濃へやろか。やろか信濃の〳〵。 詞ハアアつめたいなげに。雪國へさあささん此え。思ひ焦れ〳〵てとつと山家の苔猿が。雨にそぼ濡れてついつくばうた。かいつくばうた取りなりは。曾我のす。すつきり祐成ぢや。 詞きんにやう〳〵〳〵にやとらげ猫の〳〵情あれかし。 地二人は袖に縋り付き。信濃越後の雪よりもつ

めたい心に騙されて。さて正體なき御有様。千萬人の見るよりも。一人が見るのを恥かしう思さぬか。せめていとしやと思はずとも。人が笑へば人並に笑ふは憎や卑怯や。胴慾やと睨み付けたる襦袢の内。松山今は堪へ兼ねて尤ぞや理ぞや。お爲に斯うはしたれどもあのお身に成り給へば。今と成つて立ちはせぬこしらへ置きし言譯は。是御寛ぜと懐にたしなみし。さすがの鞘を拔き捨てゝ。南無阿彌陀佛といふ所を 詞早次郎詞をかけ。先づ待て一言いふ事ありアノ法師を椀久とは初めから知つてゐる。傾城は賣物金が敵と云ひながら捨つる命に比ぶれば千金も塵埃。地色さりながら半錢でも掠めば命を斷つ道理。さあれば又軍き物。しかし命より寶より重きは義理の二字ぞかし。我も鄙びた身ながらも太夫が色に目が見えず。切なる金は出しぬれど命庇はぬ心底の。中引き分けて行く事も物の哀を知らぬに似たり。其上親久右衞門代々御屋敷へお出入致せば。彼是以つて餘所に見られず。よしや某も愛着の根は枯れずとも。松山には暇をやると フシ至極の涙塞きあへず 地色早次郎重ねて。一先國元へ同道し。樞機を借つて親達へ。宜敷く勘當詫びなんに先づは日出度く出船と。椀久松山相輿に打乘せてさらば〳〵と立出づる。世界の事も好色も。誠を道の親とかや來し方よりも今の世々。又後世の末永く桑は色の道ならん。

右此本者依為懇望文句音節ホ悉按合加秘密令開版者也

豐竹若太夫直傳

大坂大文字寺町三丁目小倉

正本屋九兵衛刊板